修訂新撰國語讀本 佐々政一編 巻三

375.9
Sa19
資料室

41501
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
1532

資料室

大正七年一月十六日
文部省檢定濟
中學校國語科用

375.9
S019

文學博士佐々政一編

修訂新撰國語讀本

株式會社明治書院

廣島大學
教
38324
圖書

修訂新撰國語讀本卷三目次

一 明治天皇御製……一
二 畝傍の山陵……四
三 繪端書帖……八
四 西國花便り……一五
一 吉野の花信……一五
二 熊野落……一六
三 芳山の落花……一八
四 十津川の桃源境……一九

五　吉野山……二〇
六　ダンケルクの一夜　上……二二
七　ダンケルクの一夜　下……二九
八　伊勢武者と鶯……三三
九　うれしさ……三七
一〇　年中行事……四一
一一　東京……四六
一二　トラファルガルの海戰　上……五三
一三　トラファルガルの海戰　下……六〇
一四　杜鵑……六六
一五　桶峽……七二

一六　夏の小暦……七五
一七　田舍と偉人……八一
一八　南洲遺訓……八五
一九　誠……八八
二〇　武士氣質……九三
二一　ナポレオン……九九
二二　職業の選擇……一〇四
二三　實業……一〇八
二四　拙速……一一四
二五　豐太閤の逸話……一一九
二六　筆の歌……一二四

二七　蜀山人の盆燈籠……一二六
二八　讀書……一三三
二九　洋學の由來……一三九
三〇　黃色人種の自覺……一四三

修訂新撰國語讀本卷三目次終

帝國圖書館藏

修訂新撰國語讀本　卷三

一　明治天皇御製

歌

思ふことありのまにまに連ぬるが、
いとまなき世の慰めにして。

寄道述懷

言の葉の誠の道を、月花の
もてあそびとは思はざらなん。

子

思ふことうちつけにいふ幼子の
言葉はやがて歌にぞありける。

海邊霞

限なき大海原の
波のうへに
たなびき渡る
春がすみかな。

明治天皇宸筆

朝聞鶯

今朝はまたいづくの梅に宿るらん、

遠く聞ゆるうぐひすの聲。

風前花

春風の吹きのまにまにちり來るは、
いづこの庭の櫻なるらん。

述懷

世の中は、高きいやしきほどほどに
身を盡すこそつとめなりけれ。

教育

よきをとり、あしきをすてて、外國に
おとらぬ國となすよしもがな。

進みたる世にうまれたるうなゐにも、
昔のことをまづ教へなん。

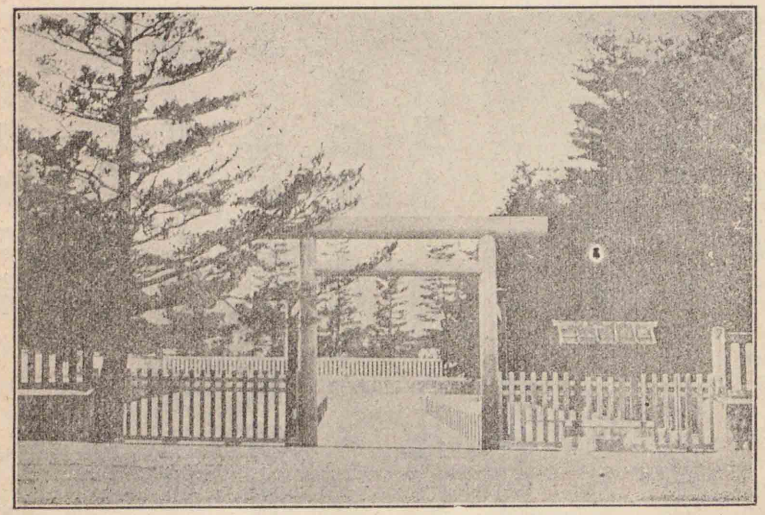
心

山をぬく人の力も、しきしまの
大和心ぞもとゐなるべき。

二　畝傍の山陵

畝傍山の東北の地數町を占めて、瑞籬いと貴く結ひめぐらしたるは皇祖神武天皇の御陵なり。われら旅衣の塵打拂ひて御前に額づく。おもふ、昔、天皇、天祖

*大和國高市郡白橿村の中央に特起す。



畝傍の山陵

の遺訓を奉じて、ここに皇基を定めたまひしより、今に至るまで殆ど三千年。君臣の分明かに、父子の親厚く、世界にたぐひなきこの一大帝國を成したまへり。われらこの國にうまれ、この君の御流を奉じて、この土に生育するもの、この御陵を拜して、いかでか限な

き感慨胸に溢れざらん。拜し終りて、伴へるもののよめる。

古をしのぶ袂に通ひけり、
畝傍の山の峯の松風。

(一)萩の家、しばし空うち眺めたりしが、
畏くも、額づく袖に散りにけり、
畝傍の山の松の下つゆ。

などいひてやうやうに御前を退く。

そもそも中古以來、王室衰へさせ給ひてよりは、歴代の帝陵定かならざるものの多かりしのみか、この

(一)落合直文の家の名。

御陵さへほとほと知られざる程にて、里人はここを「じんむ田」などと唱へ居たりとなん。さるを王政古に復りてより、今はかくめでたくしなさせ給ひしかば、なにの思ふ事もなけれども、なほ隴を得て蜀を望む人情よりいはんに、この畝傍山の全體を悉く取入れて、瑞籬廣く結ひめぐらさばいかに。さるは伊勢の神宮と相並びて、その神神しさも一しほまさりぬべく思へばなり。

さて綏靖・安寧(二)二天皇の御陵を拜みて、長谷(四)の方へと志す。耳無山(五)・天香具山(六)右左に見ゆ。古き事など更に

(二)(三)大和國高市郡白橿村に在り。
(四)大和國磯城郡初瀬村長谷觀音。
(五)同郡耳成村にあり。
(六)同郡香具山村にあり。

思ひ出でて語り合ふ。夜になりて、觀音の前なる宿につきぬ。（落合直文）

三　繪端書帖

麗かなる春の日は、隣の屋根に傾きたれど、なほ前栽の綠を洩れて、楓の影の障子に映れるもをかし。折しも訪れたりし友は歸り去りぬ。緣側にうづくまりゐて、くりひろげたるは我が繪端書帖なり。

あるが中に、一時かしましく持てはやされし戰役記念端書も、一ひら二ひらはあれど、五彩の色鮮かに、

金銀の眩ゆきものなどは、いといと稀にして、世の繪端書好きといふ人人の帖などに比ふべき映もなけれど、我にはとりどりに思ひ出おほく、棄て難き限を集めたるなり。

草花の美しきは姉上ぞ贈り給ひし。

今も花は好き給へりや。一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。良からぬ小說などな讀み給ひそ。勉强に倦み給はむ折は、花こそこよなき慰めなれ。この夏休も花圃の世話に暮し給へ。

姉より

二人して養へりし花圃は今も草花の盛りなり。姉上ぞ、げに花の美しさにおほし立てられ給ひけん、美しうなごやかに、對ひまゐらすれば、自ら春風に坐すといひけん心地のみして。今も南洋に奇しく愛でたき花の數數集へてやおはすらん。

並べて插みたるは姉君の夫の君がすさびなり。うひうひしけれど、手づから描き給へる畫なるが面白し。大波の寄せては返す巖頭に立ちて、意氣昂然たるは、自らの姿なるべし。

萬事御放念被下度候、昨今の境遇如此に候。

いまだ姉上は彼の地に渡り給はざりし頃のなり。かかる意氣にてこそ、今日の地位をも財產をも得給ひつれ。されば此の二ひらは我が訓戒として、終生の伴にせんとは思ふなり。

打渡す海の彼方に富士が根そびえて、此方なるは三保の松原なるべし。親しき友の、病をかの地に養ひたるがおこせしなり。

日に日に快く候。この好風景、如何なる藥餌も及ぶまじき心地いたし候。

とあるは、こぞの秋なりけり。その程より漸う快くて、

近きあたりの散歩など許されつ、月に二三度は必ず繪端書の音信ありしが、今年の春の初なりき、白砂青松ゑがけるなつかしき水彩畫に、

春立ちて歩いて見ればなほ寒き。

と發句めきたるもの書きておこせしは、いや果のなりけるよ。春寒の氣候に風邪を得て、俄かに病重くなりぬ、筆とることさへ禁ぜられたりと聞くに、驚きて、例の好める繪端書など買ひととのへつつ、來ん日曜こそ訪はめと期したるほどをも待たで、永き別となりにしなり。あはれ、この幾ひらこそ、またも得難き形見なれや。

叔父君の獨逸より送り給ひしは美しさ類ふべくもあらず。某が高名の聖母の像を摸したるものとぞ、氣高くしてなつかしく、威ありて猛からぬは、人間のものにあらじと見ゆ。

君が亡き母上に、眉のあたりは似たらずや。

すずろ故郷なつかしき夕に認む。

とあり。かの鬚黑き叔父上も、かかるやさしき方の御心地はおはしけるよと、父上ぞ宣はせし。

父上は繪端書は好み給はず、餘りに人人の持てはし

やすを益なき事に思ひ給へり。さるを一とせ人人と吉野に花見に行き給ひて、かしこの花の寫眞版に、

誠(一)とは誰か思はん、獨り見て、

吉野の山の春を語らば。

西行庵のほとりにて、西行の口眞似致候。眞の歌は成り難く候。

とあるぞ、唯一ひらあるなる。

一つ一つ見もて行く程に、その月その折など思ひ出でては、やがて思はあらぬ方にのみ辿られて、繪端書帖も暫し忘れ果てつ。夕食召せと呼ぶ聲に、ふとぞ

(一) 誠とは誰か思はん、獨り見て、後に今宵の月を語らば。(僧西行)

驚きぬる。

四　西國花便り

一　吉野の花信

今年もまた吉野山へ參り候。口の千本は最早葉櫻となり、吉野宮の邊まで散りかかり候へども、中の千本は今日が眞盛りにて、如意輪堂は櫻雲の裏に罩められ、後醍醐天皇の山陵も、正に「南朝天子御魂香」の句の通りに候。數日前東郷大將來られ、只今小生延元陵下に參拜する時も、某陸

(一) 今來古往跡茫茫、石馬無レ聲坏土荒。呑入二櫻花一滿山白、南朝天子御魂香。(芳野懷古、梁川星巖)

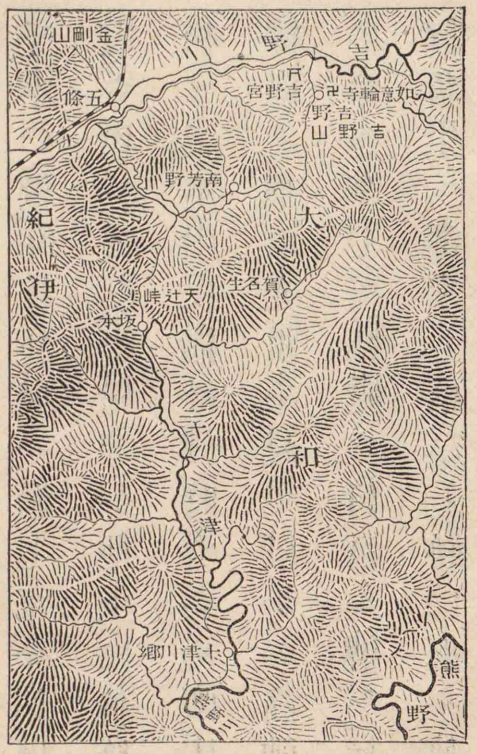
軍將官の、家族と共に如意輪寺を出でらるるを見受け候。匆匆。

二　熊野落

花の吉野を立出でて熊野落と洒落申候。本來ならば、兜巾・鈴懸の山伏姿といふ所なれども、案内兼務の供の者一人を伴ひ、まづ杣谷峠を越え申候。此處は後村上天皇賀名生(一)へ遷幸の道に候。黒瀧川・宗川などより吉野川へ流し出す材木の筏を、川水の少なき爲に、堰止めおきては一時に決して流し下す光景、なかなかの見物に候。更に

(一) 大和國吉野郡大字和田、延元以後吉野朝諸帝の皇居たりし處。

天辻峠を越えて、山麓の阪本村に辛うじて一戸の旅舍を見出し、四疊半の間に供の人夫と同宿し、頻に蚤に攻められをり候。襖一重を隔てて木挽職泊りをり候。明日は十津川郷に天忠組(二)の勤王事跡など探り申すべく候。匆匆。



(二) 文久三年(一八六三)三條實美公等七卿の長門落のことありしに續きて、藤本鐵石・吉村寅太郎等君側の姦を除かんとして、侍從中山忠光を奉じて大和に義兵を擧げ、天忠組といふ。

三　芳山の落花

蝶の羽風にも散出しさうに咲滿ちたる中の千本の櫻、昨夜狂風一過して、今朝は最早芳雲彩霞も色を失ひ、小兒等が地上に狼藉たる落英を拾うて空中に撒けば、時ならぬ吹雪となり、繽紛繚亂と飛ぶ光景を見ては、かの高師直等が北朝の命を奉じて此處の行宮を襲ひ、後村上天皇の賀名生へ遷幸し給ひし跡に火を放ち、宮殿・樓臺を焦土と爲したる當時の有樣も思ひ出され、哀さ限なく候。花時なほ然り、況して「都だにさびし

(一) 正平三年(一三〇八)正月。
(二) 都だに寂しかりしを、雲はれぬ

かりしを」と咏ぜさせ給へる、吉野の奥の五月雨頃を想像仕候ひては、泣出し度候。偶、細雨來る。

吉野の奥の五月雨のころ。(新葉和歌集、後醍醐天皇)

四　十津川の桃源境

「とんと十津川御赦免どころ、年貢いらずの作りどり」と、古來俚謠に歌はれ、南朝の遺臣が來り住みしより、德川幕府時代にも鄕士として租稅を免ぜられ、今も鄕民は概ね士族なる大和の十津川に參り候。東西七里、南北十三里、五十五の小部落あれども、その各部落は二里に三軒、三里に五軒といふ僻陬に候。併し古來土民みな勤王の

志篤く、維新前、王政復古の爲に陳勝・吳廣(一)たりし、天忠組の藤本鐵石や松本奎堂が、中山忠光卿を推して義兵を擧げたる處、四方山また山にて、一夫守れば萬夫も攻むるに難く候。吉野より熊野の道路、險阻ながらも谿山の勝は甚だ妙に候。

（坪谷水哉―手紙雜誌）

(一)秦末に擧兵の先驅者たりし人。

五　吉野山

麓も峯も咲きうづむ
花の白雲立ちなびく

吉野の山の曙を
唯うるはしと見るは誰そ。
「ここにても雲居のさくら咲きにけり、(三)
唯かりそめの宿とおもふに」。
御階のさくら、徒に
昔に歸る春待ちし、
涙のいにしへおもひ出でよ。
千本の花を掃き捨てて、
白き嵐の吹きさわぐ

(三)後醍醐天皇の御製。

吉野の山の夕暮を
唯くちをしと見るは誰そ。
「かへらじとかねて思へば、あづさゆみ
なき數にいる名をぞ止むる」。
縄手の風のはげしくて、
若木の楠の折れたりし、
涙のいにしへおもひ出でよ。（吉岡郷甫）

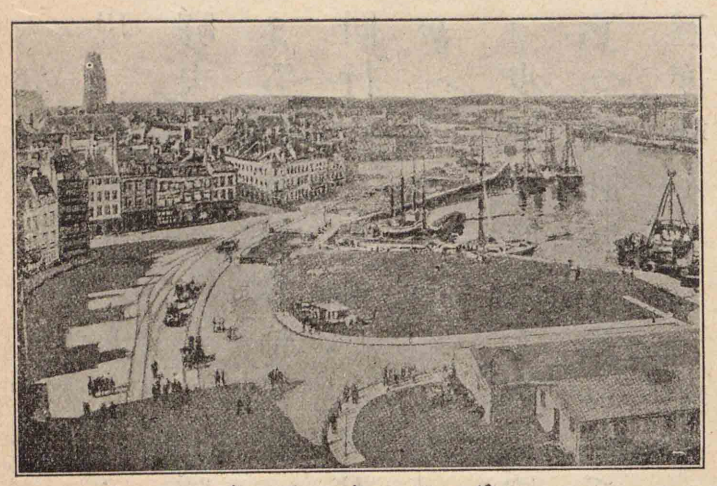
(一) 楠木正行の辭世。

六　ダンケルクの一夜 上

正義の爲に一國を犧牲にして奮闘してゐられる白義王(一)に、日本刀を獻上しようといふのが、僕の使命である。午後の五時に佛國のカレー(四)に上陸して、先づ軍政長官の許可を得る爲に、彼處此處と奔走してゐると、樣樣の薄氣味惡い噂ばかりが耳に入る。

恐ろしい恐ろしいと思ひながら、夜汽車に乘込むと、一時に疲が出て、其のまま前後

(二) Be'g.um.
(三) 大正四年一月二十九日。
(四) Calais.


ダンケルク

も知らず寢て了つた。ごとごとと汽車の軋る音を夢現に聞きながら、かれこれ三時間も經つたと思ふ頃、驛夫がダンケルク(一)と呼はる聲にぎよつとして、たちまち現實の恐怖に覺めた。時計を見ると丁度十一時、同行のハーグローヴ君(二)と共に、兎も角も歩廊に下り立つ。

歩廊は眞暗である。燈光といふ燈光を盡く消して了つて、何が何やら丸で分らなくしてある。「赤帽」と二三度呼んで見たが、誰も應ずる者がないので、ハ君と二人で荷物を兩手に提げて、僅かに天井の硝子を洩

(一) Dunkerque.

(二) ロンドンタイムスの記者。

るる月の光と、乘客の、忍び音にささやきながら、ざわざわと出て行く氣はひとをたよりに、おづおづ改札口の方へ出て行く。改札口には、驛夫が龕燈のやうなものを照して、切符を受取つて居る。此の龕燈一つの外は、一切の燈火を消して、萬一の飛行機の襲來に備へてある。停車場ばかりでない、驛を出て見ると、ダンケルクの町町、街燈もなければ、家家から燈光一つすら洩れても來ない。五層・六層の大厦の立列んだ町町が、折しも冱えわたる十四日の月を浴びて、森として靜まり返つた樣、どうしても、アラビアンナイト物語

(三) Arabian Nights' Entertainments.

などにある怪物が魔法を使つて、一切の生類を假死させた城市を見るに異ならぬ。風はないが、凍てついた敷石の道路に、月の映ずる所を見ただけで、身内がぞつとして震へて來る。

赤帽も居なければ、馬車も自動車も見つからぬ。此の邊の樣子を心得た人は、豫め身輕に扮裝つて、小さな革囊一つ位を抱へて、さつさと志す方へ歩いて行つて了つたが、僕等はうろうろしてゐる中、何時しか停車場に五六人だけで取殘された。心細いの何のといふ段でない。やや程經て、僕に荷物の番をさせておいて、其の間にハ君が其處等を駈廻つて、やつと赤帽一人見つけて來てくれた。一人ではとても二人の荷物がもてぬから、銘銘に一つ宛持つて、大きな太刀の箱は、赤帽と二人もやひで提げて、そろそろと此處を出た。微かな光を洩す家さへない上に、町には人つ子一人通らぬ。只、町の辻辻には、武裝した兵士が二三人かたまつて、非常を警めてゐるきり。これとても默りこくつて、薄暗い物影で、佩劍なんどをがちがちやつて居るばかり。如何さま、段段戰地に近づいて來た趣が見える。

行く行く月を見上げて赤帽の語る所を聞けば、「三日前から毎晩獨逸の飛行機が飛んで來る。昨夜も何度か飛んで來て、大分爆彈を落したので、八人ばかり殺された。今晩も宵の中から來るだらうと、皆恐れてゐたが、今になつても來ない。斯ういつて居る中にも見えるかも知れぬ。」などと言ふ。片時も早く家の中に入らんでは、僕が殺されるのもつらいが、折角此處迄來て、使命を全うせぬのは尙つらいので、「急がうでないか。」と、促し立てた。好い氣な赤帽は時時空を見上げて、「まだ來ませんな。」と言ふ。はては、「昨夜はあの邊から飛んで來ましたよ。」と、高い家の屋根を指していふ。そんな事はどうでも宜いではないかと忌忌しくなる。僕の心細い佛蘭西語の知識では、赤帽の言ふ事だけは、何うやら斯うやら分るが、此方からすらすらと何か言つてやることが出來ぬ。只ふんふんと聞きながら尾いて行く。

*Hotel.

七　ダンケルクの一夜 下

やつと目ざすホテル*の前に着いて見ると、堅く戸を閉めて、人の氣はひもせねば灯の氣も見えぬ。表口

から案内を求めたが、誰も出て來ぬので、更に裏口へ廻つて、こつこつと戸を叩くと、犬が盛に吠出して、遠くの方で女の聲がする。赤帽が之と二言三言問答の後、氣の毒さうな顔をして、「滿員で部屋がないのだ。」と言ふ。何でも、此の四五日前からフュルヌ(一)が全村殆ど倒潰して了つたので、國王は行在所を移されるし、住民は難を避けて、此のダンケルクへ逃げて來た。ホテルの滿員はこれが爲だといふことだ。

更に又荷物を持つて、暫く大道をうろついたが、何處にも泊るところがない。結局、今一度、前のホテルへ

(一) Furnes.

歸つて、山中公使(二)を起さうといふことになつた。

山中君は今朝ハーヴル(三)を立つて、今晩このホテルに泊つて、僕等を待合す約束である。先刻裏口で女と赤帽との問答中にも、女は山中公使なら居られると言つたのださうだ。歸つて見ると、果して居るといふ。兎も角も家の中に入りさへすれば宜いのだからと、一切の荷物を擔いで、山中君の部屋におしかけた。今寢ようとして居るところを、强ひて起きて貰つて、先づ荷物だけ預つて貰ふ。八時過からは、一切飲食物は出さぬ規則といふのを、無理に夜番の男に懇願し

(二) 名は千之。白耳義公使館二等書記官、代理公使。

(三) Havre. 佛蘭西の港。

て、麥酒と麵麭だけ取寄せて食ふ。是でやや腹も調ひ、身も暖まつたので、此處を辭して、眞暗な廊下を手探りで歩いて、其處に有合せた長椅子へ僕等は横になつた。寒くはある、暗くはある、倫敦を出て以來の旅裝束その儘、外套も靴もつけたなりで横になつたのだから、眠られさうな事はない。

まんじりともせず、一夜を椅子の上に明して、翌朝七時、ハ君と手水も使はずに食堂に出る。朝の茶を啜りながら、外面を見ると、此のホテルの傍の廣場には、今日市が立つとて、早くから澤山な露店が列んでる。此處へ又買物に集まる老若がひしひしと詰めかけて、昨夜の淋しさとは打つて變つた大變な賑ひである。之が戰線に近い、飛行機の始終飛んで來る町とは、何うしても思はれぬ。昨晩以來の事を考へると、丸で嘘のやうだ。同じ狀態が長く續くと、成る程人間の神經は痲痺するものだと思つた。

（杉村楚人冠―「戰に使して」による）

八　伊勢武者と鶯

今は昔、京都七條の南、室町に、大中臣輔親といへる

人住ひけり。その邸宅は方一町ばかりもありて、池の中島を遙かにさし出し、小松を長く植ゑて、丹後の天の橋立のさまを摸したり。寢殿の南の庇をば、月の光を入れんとて、わざとささざりけり。

春の初、軒近き梅が枝に、鶯の、日毎に巳の時ばかりに來て啼きけるを、いとおもしろく思ひて、歌よみどもに「かかることあり。明日の辰の時ばかりに來て聞きたまへ」と言遣しけり。伊勢武者の折ふし宿直してありけるに、「しかじかの事あり。人人來らん時、鶯の逃ぐることもあらんは興さむるわざなれば、その心して逃すな」と言ひふくめけり。この侍、「如何でか逃し申すべき」とうけひきたり。さてその日になりて、輔親は疾く起出でて、寢殿の南面を掃ひ清めて待ちゐたり。

辰の刻ばかりに、歌よみども集ひ來ぬ。「今や鶯來啼く」と語り合ひつつ、待てども待てども啼かず。はや巳の時も過ぎ、午の下刻になりても聲もせねば、如何にしつる事ぞと、輔親はしきりにいらだちて、かの伊勢武者を呼びて、「今朝は鶯は來ざりつるか」と問ふ。侍答へて、「鶯めはさきざきより疾く參りて候を、逃げん樣の見え候へば、召留めて置き申候」といふ。「召留むとは

如何にしけることか。」と問へば、「取りてまゐらん。」とて立ちぬ。心得ぬことを言ふものかなと思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて持來れり。あさましなど言はんも愚かなり。「何とてかくはしたるぞ。」と問へば、「昨日の仰に、『鶯來らば逃すな。』とありしかば、いふかひなく逃したらんには、弓矢取る身の面目にもかかはる事と思ひて、蕪矢もて射落したるにて候。」と申す。輔親も集まれる人人も、皆いとあさましとうち驚きて、この侍の顔を見れば、脇かいどりて得意げなり。人人はをかしけれども、この男のけしきに恐れてえも笑はず。

一人立ち、二人立ちて皆歸りけり。（「十訓抄」に據る）

九　うれしさ

雨ふらんとする空のいと暗き夕、寒風に吹送られながら、長長しき路を行盡して、やうやく吾が家の門を望み得るあたりまで歸りつきたる時、尾をふりふり狗の馳出でて悅び迎へたる、狗もまことに嬉しかるべく、主もまことにうれしかるべし。

憂しともおもひ、辛しともおもひながら、その事を爲しはてたる後、浴みしたる時の嬉しさ。

久しく讀まざりし書を引出して、心ゆるやかに見る折から、情深かりし人の文のはさまり居たるに眼とまりて、十年程の昔を今に繰返し見たる嬉しさ。

蟲のためにいたく衰へたる樹を、枝など截りつめて、活かさんものと念じたるに、多く芽をふき出して勢よくなりたるを見たる嬉しさ。

長き病のやうやく癒えたる時、緣端近くゐざり出でて、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たる嬉しさ。

親しき友の子孫などの美しう賢う生ひ立ちゆくを見る嬉しさ。

むくつけき人の、思のほかに親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたる嬉しさ。

わが言を用ひたる人の、そのため幸福多くなりたりと聞きたるうれしさ。

みづから種子を下したる草の初花咲きたる嬉しさ。

自ら克たんとはおもひながら、慾の抑へがたさに克つあたはで、歳月經たることを、一日遂に思ひきり得て、危き戰に勝ちたる心地したる嬉しさ。

自ら箒を執りて清らかに庭掃きたる後、直に落葉の一ひら二ひら、落霜紅の一顆二顆落散りたるを見ては、流石に惱ましく思ふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に箒目のあるがため、葉の散れるも實の散れるも趣をなして、をかしとも思ひなされける嬉しさ。

借りたる金を悉く返したる、なさで叶はぬことをなし果てたる、訪はで叶はぬ人を訪ひたる、讀みさしたる書を讀みつくしたる、みな嬉し。

年も暮れたる大晦日の夜に、よろづの事をしはて、明日のまうけも整ひつなど思ひつつ取片づけたる居間の、常には樣異なりたるが中に、身を清めて正しく坐りたる嬉しさ。

一月一日、父母・兄弟・姉妹皆うち揃ひたる嬉しさ。

（幸田露伴―長語）

一〇　年中行事

我が國にては式日・大祭日には國旗を掲げ、業を休み、家族團欒、赤飯を焚きて祝意を表するを一般の習慣とす。

新年には門に松と竹とを樹てて注連縄・齒朶・交讓木・橙などを飾り、床の間には、三方に載せたる鏡餅の、齒朶・交讓木・小松・海鰕・橙などをもて飾りたるを据ゑ、神棚・靈屋にも注連縄を延へ、齒朶・交讓木を飾りて、ちひさき鏡餅を供ふ。かくて一日より三日までは、一家一堂に集まりて、雜煮の餅を食ひ、屠蘇の酒を飲みて新年を祝ふ。なほ昔の式に據れる人は、七日に若菜の粥、十五日に小豆の粥を食ふことあり。また十六日には奴婢に一日の暇を取らせて、家に歸りて遊樂するを許すことあり。これをやどおり、又はやぶいりといふ。七月十六日にも亦この事あり。

さてまた歳のはじめには產土神・氏神及び先祖の墳墓に參詣し、親族・知人の家を訪ひて新年の祝詞を述ぶ。かくて童子は紙鳶を揚げ、童女は羽子を突き、夜に入りては雙六・骨牌などをして戲れ遊ぶ。また萬歳といふものの、素袍・烏帽子にて、鼓を打ち、扇を鳴し、大紋の袖を飜して、家毎に萬歳を唱へあるくは、そのむかし行はれたる蹈歌のなごりなりとぞ、今はこのもの稀になりぬ。

三月三日は昔は上巳の節とて、艾餅を食ひ、桃花の

酒を飲み、五月五日は端午の節とて、粽を食ひ、菖蒲の酒を飲み、また菖蒲を屋上に插して祝ひたりしが、今は新暦にて、桃も菖蒲もまだしければ、その事は大かた止み、ただ三月三日には童女の節供とて、床に雛人形を飾り、五月五日には童男の節供とて、門に幟・鯉幟を樹つることとなれり。

七月十五日は中元とて、親族の往來あり。又この日は盆とて、先祖の靈祭あり。盆はもと盂蘭盆の略語にて、佛家の行事より出でたるものなり。十三日よりはじまりて十六日に終る。盆中は墓前・靈前に蓮の葉に盛りたる強飯を供へ、香を焚き、燈籠をともす。また神靈を慰めんとて、人人あつまり、音頭を取りて踊ることあり。これを盆踊といふ。九月九日は重陽の節供とて、昔は菊花の酒を飲み、栗の飯を食ひたりしが、今は季節の異なる爲に、二種の物なければその事なし。

十二月は歳暮の月なれば、家家に煤掃の事あり。また新年に用ふべきために餅搗の事あり。かくて三十一日の夜は除夜といひて、一年の終なれば、神棚・靈屋には神酒・神饌を供へ、家族一堂に集まり、夜半過ぐる迄は起きゐて、一年の間にありし事ども語り合ふ。十

二時を過ぐるほどよりは、ここ・かしこの寺寺にて、百八の鐘といふを撞きならして、歳のすでに暮れたるを報ず。むかしはこの夜、追儺といふこと事ありしかど、いまは節分の夜に「福は内、鬼は外」と叫びて、熬豆を家内にうち撒くこととなりたれば、さる習は絶えにき。（物集高見―日本の人）

一一　東京

東京の地は古の武藏野の一角なり。その昔を思へば、萱・薄の廣野、潮入の葦原ただ茫茫として、草わけ渡る風の聲も淋しく、彼處に一村、此處に一村、牧童漁翁が煙をあぐるばかりの片田舍なりき。

源平時代には、武藏八平氏の一なる江戸氏ここに住みて、子孫代代この地を領したり。下つて室町幕府の衰へしころ、關東管領上杉氏[一]の老臣太田道灌[二]、千代田の地を相して城郭を構ふ。卽ち江戸城にして、長祿元年工事成りぬ。城樓に上りて見渡せば、關東の平野は、東に筑波の翠、西に富士の白妙、その外に眼を遮るものもなし。思ふに、封建の要害よりも文明の都會たるべき處なり。道灌その主に殺されて、城は上杉氏の

（一）上杉定正。
（二）名は持資。（二〇九二―二四六）
（三）二一一七。

直轄となりしが、小田原の北條氏が上杉を破るに及びて、その手に歸したり。その後、豐臣秀吉北條を滅ぼし、德川家康にその舊領を與へて、江戸城に居らしめたり。

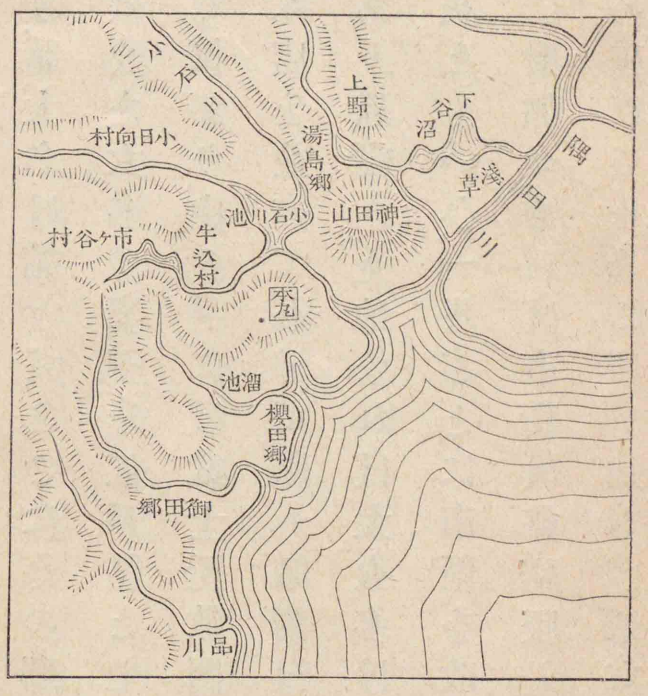
天正十八年八月朔日、家康入城す。時に城内いたく荒れ、そぎ葺の屋根は漏り、船板の塀は朽ちて、見るかげもなき樣なるを普請し、又町割を定め、沼を埋め、渠を開き、水道を通じ、橋を架けて、切りに新府を經營す。これより四方の民來り集まり、關東の中心は小田原より轉じて江戸に移れり。

(一)相模國足柄郡。
(二)天保五年。(三二七)
(三)二二五〇。

關が原の戰を經て、家康が天下の覇權を握りしより、諸大名は請うてここにその邸を營み、寛永年間にはまた大名の妻子を江戸詰としたれば、市街は著しく擴がり、山の手には武士屋敷門を列ね、下町には町家店を並べて、わけて賑へる所は、土一升金一升の稱あり。風强き土地なれば大火多けれど、火事は江戸の花ともいひ、一災ごとに市區を改正して繁昌は年年に增加す。されば市街は益膨脹して、川を越え、田を埋め、延びて止まる所を知らざる有樣なりき。天明頃の計算によりて大體を推せば、當時の人口は既に二百

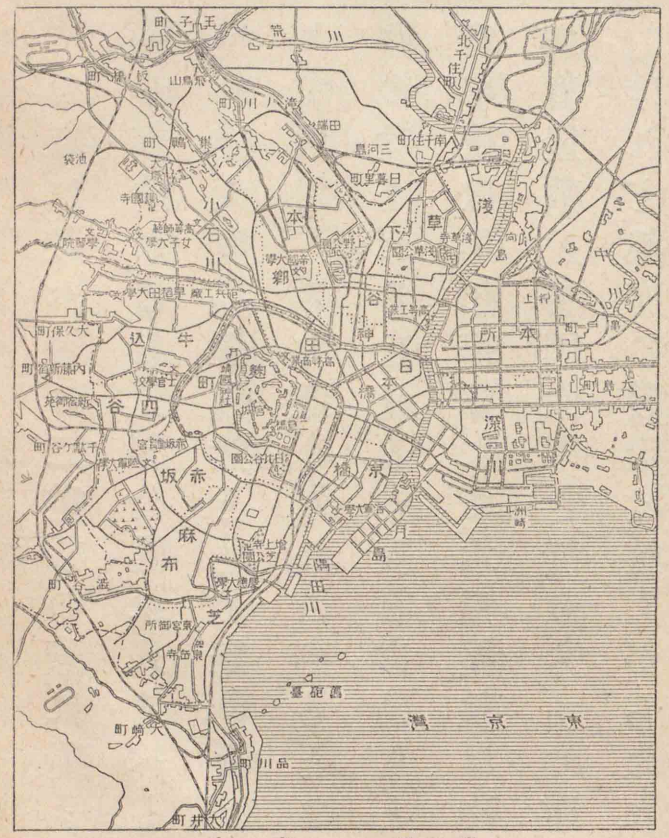
(四)二二八四―二三〇四。
(五)二四四一―二四四八。

萬に近かりしものの如し。花の大江戸の誇稱も空しからず。



家康開府當時の江戸

維新の際、幕府は倒れ、旗本は離散し、大名は妻子・家臣を率ゐて藩國に歸りたれば、三百年の覇府も忽に衰へ、一時は人家を壞して桑畠とするものさへありき。されどそれも一時のことなりき。明治元年詔ありて江戸を東京と改稱し、車駕東下ありしが、一旦京都に還幸あり。されど議更に動き、翌年再び行幸ありて、永く千代田城を皇居と定めたまふ。これより東京はわ



現代の東京

が邦の帝都となれり。

東京に遊ぶもの二重橋の際に跪きて宮城を拜し、一歩南すれば日比谷公園に入るべし。立ちて四方を望めば、大廈高屋巍然として聳ゆ。それより電車に乘りて、坦坦たる大道を走れば、到るところに江戸の舊觀の改まれるを見る。赤阪離宮はもとの紀州藩邸、士官學校は尾州藩邸にて、水戸屋敷は砲兵工廠となり、加賀屋敷は帝國大學と變りぬ。古の跡の亡ぶるは惜しけれど、都府の發達は嬉しからぬにあらず。一喜一憂、低回して古今の變に驚くのみ。（藤岡東圃）

一二　トラファルガルの海戰　上

ナポレオン一世、身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨するや、列國の群雄皆震懾屏息してその部下に屬せしが、ひとり英國のみは孤立を守りてあへて屈せず、その島國たるを利用して優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、しばしば佛軍を惱ましたり。ここに於てナポレオンは畢生の力を盡し、雄兵十五萬をブーロー*ニュに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮べ、ま

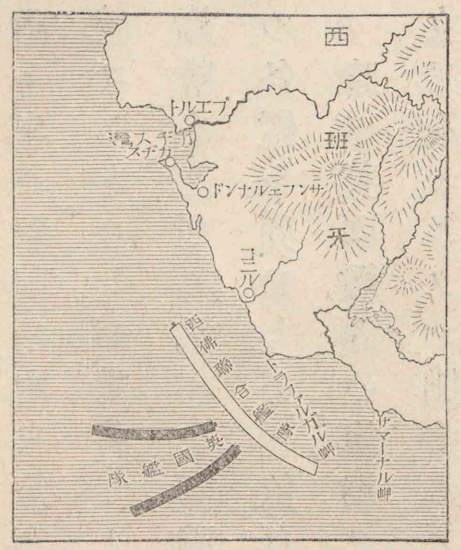
*Boulogne. 佛國の東北隅。

づ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、その虚に乘じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峽を一躍して英國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督ネルソンは、豫てよりナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以ておのれの天職なりと確信し居たりしが、いまナポレオン大擧して英國を侵略せんとすと聞き、「佛帝たとひ鬼神の術ありとも、その海岸を距る一海里の外に出でしめじ。」といひて、直に敵の艦隊を追尾して、カヂズ港の附近にいたりぬ。時に佛國の提督ビールヌーブ西

(一) Cadiz.
(二) Villeneuve

班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して英國艦隊と戰ふ用意をなせり。ネルソンこれを悟り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みてトラファルガル岬の邊に達し、遂に敵の隊と相會す。時に西曆一千八百五年十月二十一日なり。



ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦隊を分ちて二隊の縱陣とし、副提督コリングウード(三)をしてその一隊を指揮

(三) Collingwood.

せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべきを命じ、みづからは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、まづその一部を撃破せんとせしが、佛將ビールヌーブこれを察し、その艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間に當る點に後隊の各艦を列せしめ、相依りて空隙なからしめたり。

時に英國艦隊の旗艦ビクトリー號の上甲板に佇立せるネルソン、側なるブラックウードを顧みて「君は幾何の敵艦を捕獲せば、わが勝戰なることを是認すべきか」と問ふ。ブラックウード「十五隻を捕獲せば

(一) Victory.
(二) Blackwood.

以て偉功となすに足らん」と答ふ。ネルソン頭を振り、「否、われは二十隻を捕獲するにあらずば滿足すること能はざるべし」といふ。やがてその室に赴き、正裝して燦爛たる數箇の勳章を胸間に懸け、肅然として天に向ひ、「神よ、願はくは、わが英國に赫赫たる大勝を授け、全歐洲の國民をその塗炭の苦しみより救ひ給へ。願はくは、わが將卒をして一人も卑怯の擧動をなすものなからしめ給へ。併せ願はくは、戰勝後、わが軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身は固より惜しむに足らず。ただわが忠誠を憐みて

*England expects that every man will do his duty.

應護を垂れ給へ。」と禱りて、やがて甲板に出でたるに、敵艦いよいよ近づく。英軍の意氣ますます壯なり。ネルソンまたブラックウードを顧みて、「なほ一信號旗の掲げざるべからざるものあり。」とて、直に信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。その信號は、「英國は各自がその本分を盡さんことを期待す。」といふことなり。英國總艦隊これを望みて狂喜措くこと能はず、拍手喝采の聲、海波もために震はんとす。ネルソン莞爾として、「今ははや準備に於て遺憾なし。餘はただ神とわが正義とを賴まんのみ。」といひしが、やがて、「接戰せよ。」との信號旗は檣頭高く掲げられたり。

旗艦ビクトリー號、前驅率先して進みしが、着彈距離に達するや、數隻の敵艦これに向ひて砲擊を始め、飛彈こもごもネルソンの頭上に轟く。ブラックウードその本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつつ、「余はまた速かに本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる閣下の壯貌を拜すべし。」といへば、ネルソン、「われは既に國家の爲に一身を犧牲にせんとせり、再び相語ることを期せず。」といふ。意氣軒昂、爽快の色その眉宇の間に溢れたり。

(二) Santa Anna.　(一) Royal Sovereign.

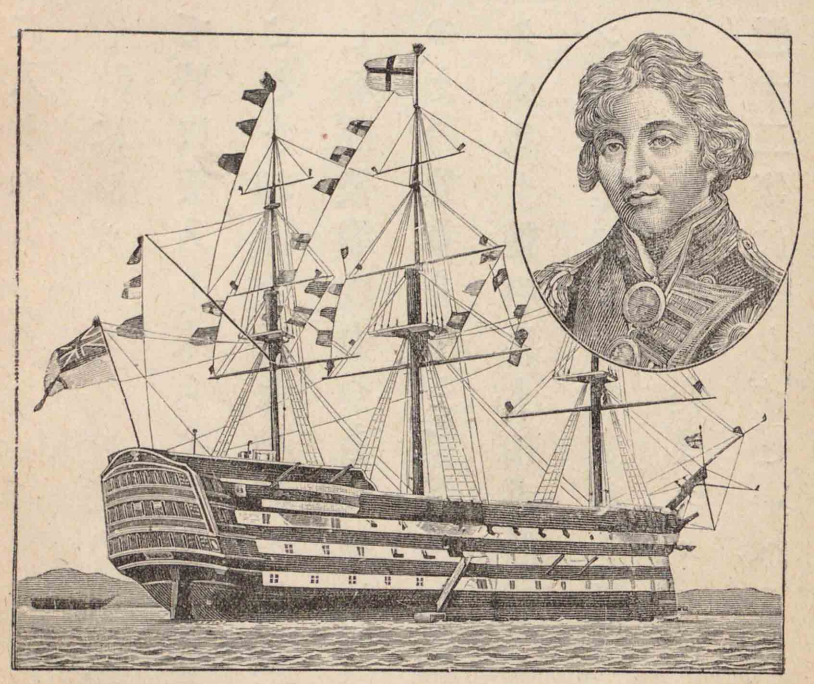
一三　トラファルガルの海戰下

時に副提督コリングウードの旗艦ロイヤル-サベレーン號は、その艦隊の先登に立ち、健帆風を孕みて、西班牙の戰艦サンタ-アンナ(二)號に向ひて進みしが、その艦尾に達するや、二彈を重塡せる左舷の大砲を一齊に發射し、忽ちこれを擊破せり。ネルソン遙かにこれを望み、欣然として左右を顧み、「好丈夫の意氣を見よ。猛烈鬼神の如し」といふ。既にして佛の諸艦、皆ビクトリー號を目蒐けて進み來りしかば、飛彈實に急雨の如く、艦體破壞し、索具斷絶し、兵士の戰死するもの頗る多し。然れどもなほ堅く忍びて一發も應砲せず。ますます進みて佛の提督ビールヌーブの旗艦をもとむ。ビールヌーブこれを避けんが爲、殊更に將旗を揭げざりしかど、ネルソンその陣形によりて、旗艦の第二位にあることを看破し、猛然これに薄り、まづ艦窓に向ひて小銃五百の一齊射擊を行ひ、續いて三彈を重塡せる左舷の大砲を一時に發射せり。波濤驚き、雲霧裂け、その音百雷の一時に落つるがごとく、敵兵四百算を亂して殪れ、二十門の巨礮毀損し、艦體大破

(一) Redoutable.　(二) Hardy.

してまた用ふること能はざるに至れり。

ここにネルソンいよいよ奮戰して進み、右舷の諸砲を以て別に敵艦レヅータブル(一)號を砲擊しつつ、遂にこれに衝突せり。この時に當り、英の諸艦長各、猛進して佛艦と接戰し、兩軍の戰正に酣にして、奮鬪殆ど一時間ならんとするをりしも、レヅータブル號の檣樓より一發の銃丸飛來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りてこれを倒したり。衆駭きて相集まり、直にネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーディー(二)を見て、「佛奴われを狙擊したるが爲、彈丸わが脊髓を貫けり。恐らくは復起つ能はざるべし」といふ。かくてネルソンはわが負傷の一事、徒に兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に手巾をいだし、わが面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室



ネルソンとビクトリー號

に入りぬ

時にレヴータブル號の兵士、艦上に襲擊隊を組みて、將に突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射してこれを却け、なほ大小砲を連發してその過半を殪ししかば、彼等は力つきて遂に降伏せしが、續いて敵艦の、その旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず。ビクトリー號の兵士、拍手・歡呼して、聲、雷の如し。ネルソン治療室にありてこれを聞き、思はず微笑せり。

ハーヂーたまたまネルソンの側に來り、「捕獲の敵艦十二隻に下らず」といへるに、ネルソン「わが艦の敵に降れるものなきか」と問ふ。ハーヂー聲に應じて、「一隻もなし」と答ふ。ハーヂーやがて甲板に上り、一時間を經ずして再び訪來れるに、ネルソンその艦隊をして投錨せしめんとの念切なりしかば、これをハーヂーに命ず。ハーヂー、「艦隊の運動は副提督コリングウードの指揮に任せ給へ」といひしに、ネルソン頭を振り、「苟もわが殘喘なほ存する間は、何ぞ指揮の權を他人に委せん」といふ。既にして薄暮に至り、佛西兩國の聯合艦隊大敗して砲聲全く收まり、ネルソンの氣息も亦奄奄たり。左右口をその耳朶にあてて、「全勝わが

軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり」と報ぜしに、ネルソン莞爾として、遂に瞑せり。（小笠原長生―帝國海軍史論）

一四　杜鵑

ほととぎす自由自在に聞く里は
酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。

といふ歌は、子供の時分に聞覺えたもので、杜鵑は中中聽く機會の少ないものだと思つて居た。「てつぺんかけたか」といふ啼き聲だといふことも、早くから人に聞かされたが、本物を聞いたことは一度もないの

で、どうかして、是非聞いて見たいものだと、豫てあこがれて居た。東京へ出てから、親戚の別莊が巢鴨に在つて、其處では、折折杜鵑が聞えると云ふので、三月ばかり、其の別莊に住まはせて貰つたこともあるが、とうとう望を遂げ得られなかつた。其の後、萬葉集を讀んで見ると、晝は終日、夜は徹宵、杜鵑が來啼きとよもすと云ふ歌の文句が、頻に目に附く。昔はそんなに杜鵑が多かつたものかしら、歌人の大袈裟な言廻しではあるまいかと、半信半疑であつた。

京都へ來てからは、ここかしこに、杜鵑の名所があ

るやうに聞いた。嵯峨の小倉山邊では、晝でも杜鵑が啼いて居ると云ふ話だ。けれども未だ一度も行く機會が無かつた。所が四月半ばに、叡山へ上つた時、雲母越の途中から道連れになつた叡山通の話に、初夏の新綠の頃、既望後の月夜に、杜鵑を聽きながら上るのが、會心の極であると聞いて、宿願成就の時節到來と、心中に歎呼の聲を禁じ得なかつた。

そこで大正二年五月二十三日、陰曆十八日の夜、雲母越を四明が嶽に上ることと一決した。頂上に達する頃、夜の白白と明ける景色が得も言はず美しいと

聞いて居るから、午前一時半頃結束して、同行二人、犬を連れて出發した。月影は穩かな仄白い光で一帶の山野を覆ひ、坐ろにゲーテ*の「月の歌」を偲ばせる。東山のふつくりした寢姿、叡山のどつしりした雄姿が、はつきりと眼に映じる。

一乘寺村を通ると、人家は盡く寢靜まつて、折折犬の遠吼を聞くのみであるが、かかる田舍の茅屋にまで引かれた電燈の火影は、戸の隙間から外へ洩れて居る。愈〻雲母阪に掛ると、左右から覆ひ被さつた木下闇に、鼻を撮まれても分らない。何遍か此の阪を往き

* Goethe. 獨逸の大詩人。

來したことのあるペスも、今夜ばかりは心細いと見えて、悲しさうな聲を出して、頻に足許に纏はる。晝間でも隨分骨の折れる阪を眞の闇に登るのであるから、折折石に躓いたり、雨落ちの窪みへ滑り込んだりしながら進むと、遙か上の方で何やら聞えた樣な氣がする。杜鵑ぢやないかと、立止つて耳を立てる。後が續かないので見當が附かぬ。或は一町も先の方に進んでゐるペスの啼き聲かとも思はれた。

音羽瀧の聞える平坦な隘路に出ると、再び月光に浴する身となつた。一町も行かぬ中、復しても阪路に差掛る。夜陰の有り難さには、露の深いだけ餘程涼しいので、喘ぎ喘ぎ登つても、汗は左程に出ぬ。二十分も經つたかと思ふ頃、愈〻杜鵑の聲が聞えだした。これが臍の緒切つて始めて聞いたのであるから、一所懸命に耳を澄す。成る程、「てつぺんかけたか」と聞える。餘程佳い聲だ。前に記した叡山通が、遠州の山奥で見たと云つて、「杜鵑が一羽、樹の枝に留つて居ると、下の枝に鶯が二羽留つてゐて、さも感心した樣に、杜鵑の啼き聲を傾聽して居た。云はば杜鵑は鶯の先生である」といふ樣な話を聞かせた。あの聲なら、鶯の先生といは

れても恥かしくないと思つた。（藤代禎輔―文藝と人生）

一五　桶狹[一]

天地に轟くはたたがみ、
篠を束ねて降る雨を、
神のたすけと岨づたひ、
轡をつつみ、草摺卷きて、
攻めいる必死の三千騎。
沓掛[二]・大高[三]・笠寺[四]の
野にも山にも充ち滿ちたる、

（一）尾張國知多郡共和村大字桶狹。永祿三年（一五六〇）織田信長、今川義元をこの地に襲ひてその首を獲たり。

（二）（三）（四）知多郡内の部落。

四萬五千の駿河の軍勢。
明日は清洲[五]を攻めおとし、
決河破竹のいきほひにて、
尾張の國をさだめんと、
心おごりの酒ほがひ。
松の嵐は琴のしらべ、
鳴神のおとは鼓のひびき、
よに心地よきうたげやと、
佩きつる太刀の緒うちとけて
歌ひつ舞ひつ、興もやや

（五）尾張國西春日井郡清洲城。

闌なりしをりしもあれ、
四面におこる鬨のこゑ、
すはや敵ぞといはせもあへず、
雨よりしげき寄手の槍先、
嵐を吹きまくかたきの太刀風。
天たちまちくつがへり、
地見る見る裂け、
きらめく稲妻光のひまに、
二千餘人の玉の緒は、
草葉のつゆと消えにけり。

ああ、さだめなき人の世や、
たのまれぬ人の身や。
さもいかめしく轟きし
名はときのまのはたたがみ。
夢の名殘の松風も、
昔のあとや尋ぬらん、
さみだれ寒き桶峽。（中村秋香―不盡廼舍遺稿）

一六　夏の小暦

七月初旬の曇天は續いて月の末に至ることあり。

また中旬より晴れて、赫耀たる炎威を恣にすることあり。ここに至りて人は初めて夏の暑さを感ず。

夏は曇りたるより照りたるぞよき。空碧に、日の光きらきらかにかがやきて、金をも銷さん如き日、靜かに机にむかひて書を讀むも興なきにあらず。黄塵の堆き裏におのが業にいそしむも、亦おのづから樂しみあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつつ、靜かに華胥に遊ぶ暇あらば、いかに嬉しからん。

日の暮るるを待ちて、檐の岐阜提燈に火を點じ、緣に花蓙敷きて、團扇搖がしつつ、一家團欒の物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指しあはん。月あらば殊更なり。梧桐・寒山竹の間より、研ぎすましたる鏡の如き光を仰がんには、晝のあつさも忘れ果つべし。

幼き頃、田舍に居て、垣根の杉などを手折り來て、古摺鉢に灰少し入れて、蚊いぶしたることを思ひ起す。蚊遣火は趣深きものなり。そこともの知らぬ森の中に、ゆくりなく立飇る蚊遣の烟、ここにも人住めりやとなつかし。

夏の旅ことにをかし。日盛りの二三時間を、松並木の涼しき休茶屋に寢て過し、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却りて長き里程を歩み得べし。田舍道の休茶屋などに、清き水湧きいでて、素麺を冷したる、食指おのづから動く。

登山も夏の面白きものの一つなり。輕裝して都を出で、遙かに連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上にあり。登山の快味は絶巓に登り得たる時にあり、これ言ふを俟たず。されど絶巓の上に至るの努力も、亦快味の一なり。喘ぎ喘ぎつつ登るに、森林盡き、草原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊磊たる處に達す。一望まことに天下を小にする思あるべし。登るべき山は、富士山を始め、木曾の御嶽・駒が嶽、日本アルプスの稱ある飛驒の乘鞍が嶽・槍が嶽、北陸の白山・立山など。

海もよし、山もよし、山深く、谿流清く、翠嵐搖曳たる處、殊によし。海ならば絶海のほとり、怒濤天を捲く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など、徒に暑を增すの料たらんのみ。

七月中旬乃至下旬より晴れたる空は、年によりて多少の相違はあれど、十五日乃至二十日續くべし。こ

の照りによりて、稻も其の穗を成長せしむ。この照りこの暑さのやや緩む時、卽ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻なり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空顯れ、日の光射すかと思へば、白き黑き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として至る。物干竿の衣を取入るる間も無し。その雨量比較的に多く、地によりては河水氾濫し、鐵道不通になること往往にしてあり。避暑に赴きて此の雨に逢ふは侘しき限なり。海も侘し、山も侘し。避暑に行く人は此の雨以前に赴くをよしとす。

宋の文豪。（一六六七—一七三二）

此の雨晴れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間叢裡既に秋の聲あり。梧桐・芭蕉は殊に此の聲を聞くに佳し。歐陽修*が秋聲賦の思ひ出さるるは此の頃なり。

雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少なく、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るも此の頃なり。一閃毎に、闇の中の雲の姿を明かに辨じ得たる、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹きわたる。（田山花袋—花袋小品）

一七　田舍と偉人

世人常に謂ふ「英雄・豪傑の士は必ずや隴畝の間より崛起す、曾て都會に生るるあらず」と。固より篤論にあらずと雖も、蓋し一世を動かす英雄・豪傑は多くは村落・邑里より出づるが如し。即ち豐臣秀吉の中村(一)より出でたるが如き、ビスマルク(二)のシェーンハウゼン(三)より出でたるが如き、その他擧げ來れば、苟も名を當代に擅にし、譽を後昆に垂れたる學者・事業家・詩人・義士の、身を村閭・茅屋の下より起して、遂に天下に雄飛するに至りしもの、極めて多し。これ都會に生れ、都會に長じ、都會に老い、畢世齷齪として都門の中に生活するは、なほ畢生一家中に屏息すると同じく、天地狹隘、宇宙窄小、更に活潑・清澄・宏大・雄壯なる心氣の伸ぶるなければなり。それ、身、都門の中に生活し、而して身體を強固にし、精神を旺盛ならしめんことは、時に郊外に散策して自然の壯觀を眺め、以てその心身を養ふに在り。鄕里の地や、都門を距ること二十里・三十里なるもあらん、百里・二百里に上るもあらん。然れども舟車の便を假らば均しく比隣の如きのみ。故に往くに鐵路若しくは船舶に依り、而して歸るや亦これに依らば、日曜日天朗かなる時近郊に遊ぶと、何の異な

(一) 尾張國愛知郡。
(二) Bismarck. (1815—1898)
(三) Schönhausen. エルベ河畔の小邑。

る所かあらん。

抑、都門の紛紛囂囂たるは、人生の爲に必要ならざるにあらずと雖も、一層大なる志氣を涵養せんには、都門を離るること遠く、山高く、水長く、萬境自然なる處に於て、清淨なる空氣を呼吸せざるべからず。血氣未だ定まらず、心身猶堅固ならざる時にしてや、その學業の暇、幸に故山に歸るが如き機會あらば、道途を迂廻して、名山大川の間を逍遙し、時には孤枕を山驛の夢に欹てて、遠く猿兒の叫ぶを聞き、時には山徑欹危、細棧纔かに通ずる所、岩もる水を掬して以て渴を

醫する、これ洵に務めて試むべし。（三宅雪嶺）

一八　南洲遺訓

事大小となく正道を蹈み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第、工夫の出來る樣に思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なるやうなれども、さきに行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐りて驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛すまじきものなり。

過を改むるに、自ら過てりと思ひつかばそれにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に一歩蹈みだすべし。過をくやしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割りし時、その缺を集めて合せ見ると同じことにて、詮なき事なり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業を成し遂ぐることは望み得ざるなり。

道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰・悅服せらるるものは只これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げ

て數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるるは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。（西郷南洲）

(一) 曾我十郎祐成・五郎時致、父の仇なる工藤祐經を富士の裾野に殺す。時に建久四年（一一九三）なり。

一九　誠

或人司馬温公に、誠に入る方を問ひければ、「妄語せざるより入る。」といはれしとぞ。げに妄に語らず、虚言をいはぬより、誠の道には入るべきなれど、虚言をいはぬを直に誠とはいはず、誠は虚言をいはぬその眞心の現れたるものなり。故に啻に虚言せざるのみならず、行をも僞らず、欺かざるは、誠に入る近道なるべし。

(二) 司馬光、宋の政事家、史家。（一一六七―一一四六）

昔、衞の靈公といひし君、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて復鳴りけり。靈公、「誰なるべきか。」と南子に問ひ給ひければ、「これは蘧伯玉なるべし。禮に、『下公門式路馬』といふことあり。忠臣・孝子は昭昭の爲に節を信べず、冥冥の爲に行を墮さず。蘧伯玉は衞の

(三) 支那の春秋時代の人。

(四) 衞の賢大夫。

(五) 禮記なり。

賢人なり。夜なればとて禮を廢せじ」といひけり。靈公人をして見しめ給ひけるに、果して伯玉にてありけり。

人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思へども、天知る、地知る、人知る、吾知る、いかでか蔽ひ隱すべき。たとへば一升の米、日日二三十粒は取るとも、置くとも知れざるべし。然れども久しうして、置く時はまし、取る時はへる。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬ樣なれども、誠といふものの少しの間斷なき故に、いつ太

*楊震曰、天知神知我知子知、何謂無知。（後漢書）

るともなけれども、次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふままには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、常によく薫り、うつくしく照ればこそあれ、人の至るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、間にあふことあるべからず。常常心にかけて掃除したらん座席と、俄かに蜘蛛のいとり、柱ふきたらんとはいかで見まがふべき。人、平生をたしなまずして、その期に臨みて僞り文らんは、誠の俄掃除なるべし。

すべて人は欺くべからずして、欺くはみづから我

が心を欺くなり。

なき名ぞと人にはいひてありぬべし、
心のとはばいかがこたへん。

と、古歌にいへるが如く、心に心を顧みて、欺ける我が心を咎めたらんには、ひとり居るとも額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、僞なき旨を起請を以て申し上ぐべしとありければ、「われ一生僞をいひしことなし。この事に限りて起請をばかくまじ」とて、終に書かざりしこそ、勝れていみじくきこゆなれ。（三浦晉―「梅園叢書」に據る）

（一）後撰集の歌、讀人しらず。
（二）源頼朝の功臣。（一八三四―一八六五）
（三）源頼朝。

二〇　武士氣質

上杉景勝（四）が兵起りし時、伊達（五）左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎて馳下る。

白河（六）より白石（七）に至る間は、皆敵の中なれば道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬（八）に差掛つて國に歸らんとするに、相馬亦累代の敵國なり。恙なく通らん事叶ふべからず。然るに政宗は僅かに五十騎ばかり引具して、常陸國を經て相馬の境に至り、先づ相馬が許

（四）上杉謙信の養子（一三二五―一三八五）。慶長五年石田三成と計り家康を除かんとす。當時會津にありき。
（五）仙臺城主。（一三三七―一三九六）
（六）磐城國西白河郡、陸羽街道にあたる。
（七）同國刈田郡、亦陸羽街道にあたる。
（八）同國中村、相馬氏の所領。

に使者を立て、「此の度(一)徳川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に到り侍りぬ。餘りに道を早めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と言はせたり。長門守義胤これを聞いて、「あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。ただにても伊達は相馬が年來の敵なり、ましてや身方討たれん一方の大將承るといふ者を。いていで今宵一夜討して、案内知らぬ者共を、此處彼處に追詰

(一) 徳川家康。

(二) 相馬義胤。(一三一七—一三九四)。上杉景勝に黨せり。

めて、一人も殘さず討取つて、年來の仇に報い、此の度の賞に預らばや。」とて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の樣をぞ議したりける。

爰に水谷三郎兵衞尉某、遙かの末座より進み出で、「末座の意見恐れ入つて候へど、既に僉議の座に列なつて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑〻『窮鳥懷に入る時は、獵者も之を殺さず』とこそ承れ。政宗程の大名が、既に年來の怨を棄て、君を賴みて來りしを、たばかつて闇闇と討たんは、勇者の本意とする所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。又わが城を去

つて、彼の國の境、駒*が峯に到らんこと、行程僅かに三里。けふの日未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以て此處に止まること、豈に深き謀計あらざらんや。只同じくは我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。」と申しければ、滿座の輩皆この議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料・魚鹽・秣・糠・藁に至る迄積置きて、夜に入りては、四面に篝火たか

*岩城國中村の北方にあり。

せ、共に夜を巡らせ、警衛心を盡してけり。

義胤が士共も、政宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎し、いざ彼が振舞を試みん。」とて、夜更けて馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候。御人や候。」と言ひし時、「さむらふ。」とて參りければ、「物音高う候。何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎭めてたべ。」とて、又内にぞ入りにける。斯くて夜明けけれども立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が

許に使して一禮し、靜かに馬をうつて行く。竊かに人を付けて見せたるに、彼の國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充ち滿ちて出迎へぬ。

斯くて關が原の合戰終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所帶を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗、德川殿に度度歎き奉りしかば、其の事となく、年月を經て後、本領をぞ賜うたりける。此の時より、かの家、年毎の評定始には、滿座の輩一一に水谷が子孫の座の前に進みより、「水谷殿の御意見違ふ事あるべからず」と色代して罷出づること、長き佳例となりにけり。

二一　ナポレオン

（藩翰譜―新井白石）

世に英雄は多いけれど、拿翁*のやうに其の出世の華華しい英雄は復と無い。而して其の亡び方の異樣に物凄い英雄も復と無い。

彼は實に、第十九世紀の劈頭に花を飾つた人である。第十九世紀といふ大舞臺・大活劇の幕を開けたのが彼だ。彼は千七百六十九年に、殆ど人の振返つて見もせぬ、地中海の小島に生れて、三十の歳には、はや全

* Napoleon Bonaparte.

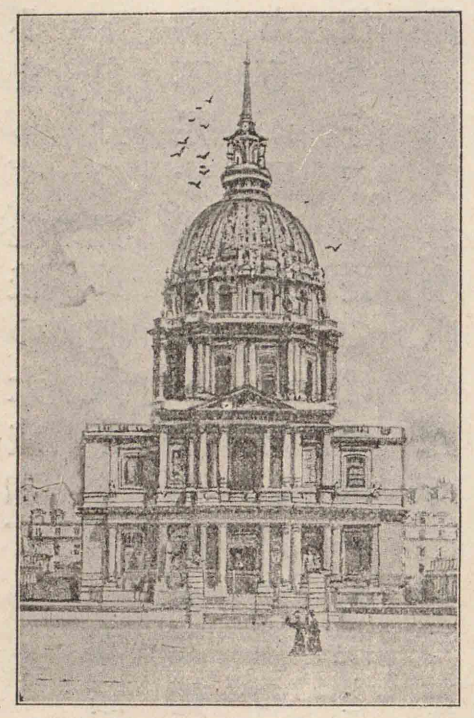
佛國を足下に蹈へてゐる大將であつた。第十九世紀の幕の開いた千八百一年には、既に議政官の長となつて、國王のない國に、國王と同じ身分となつてゐた。

猛りに猛つた民權論の眞盛り、革命の直中に出で、直に其の民權論を蹂躙し、殆ど全國民の生殺與奪の權を一手に握るとは、何たる怪物であらう。彼が皇帝といふ尊號を得たのが、彼の三十六歲の年卽ち千八百四年で、民權も革命も總て彼の前に拜跪した。

ナポレオン

(一) Germany.
(二) Spain.
(三) Italy
(四) Holland.
(五) Austria.
(六) Russia.

この時に當つて、彼は佛國の皇帝たるのみでなく、全歐洲の王である。殆ど人間の閻魔大王ともなつてゐた。日耳曼(一)も西班牙(二)も伊太利(三)も和蘭陀(四)も墺地利(五)も、皆彼の配下に立ち、北方の强ともいふべき露國(六)までが、彼の鼻息を窺うて、慴伏してゐた。海を隔てた英國より外には、彼の意のままにならぬ國はなかつ



ナポレオンの墓

た。歴史家が、此の時の彼を指して「空前の大野心の空前の大成功」と云つたのは無理ではない。實に、空前のみならず、絶後の大成功である。

自分の兄弟三人をさつさと諸國の王にとり立て、尚不足する處は、手下の軍人で補うた。亂暴は亂暴であるが、國王製造者といふ無類の異名を得たほどの仕事をやつたのは、千古の奇觀といふべしだ。兵隊を議場に入れ、喇叭の聲で、議員の怒聲を埋めて置いて、一蹶して國家の長となり、再蹶して皇帝となり、三蹶して皇帝の上の皇帝となつた。而して其の四蹶が面

(一) Corsica.
(二) Elba.
(三) Grenoble.

白い。自分の生れたコルシカ島から遠くもないエルバの島へ、皇帝といふ尊號をもつたまま流されて、蜑が焚く火に、わび寢の夢を照される人とはなつた。

けれど四蹶には終らぬ。五蹶してエルバを脱するや、備への嚴重なグレノブルの關所を單身で越えようとして、番兵の前に立ち、「防禦の武器もなき皇帝を射殺して、汝の功名すべきは今ぞ」と告げた。膽力天地を呑むとはこの事であらう。番兵が、かれの膝に、かれの足に縋りついたのも尤もである。佛國全土の民が、簞食壺漿せんばかりに歡迎したのも尤もである。

これといふのも、畢竟は、天がこの逞しい俳優に、大詰の一幕、(一)ウォタールーの敗軍から、英國の軍艦で(二)セントヘレナの孤島に流される、英雄の末路を演じさせ、「私欲より上に脱しない者には、永久の成功なし」といふ、大いなる教訓を遺さんがためであつたのであらう。彼は多くの英雄豪傑と同じく、偶然の人間ではない。天帝が道具に使はれた、特製の役者である。

（黒岩周六）

(一) Waterloo.
(二) St. Helena.

二二　職業の選擇

肅啓。令弟實業に志され候由承り、一喜一憂致候。一喜と申すは、虚譽心の強き時代なるに拘らず、白馬金鞍連の群議を却けて、斷じて實業界に入らんとせらるる決心の立派なるを稱してに候。一憂と申すは、令弟が果して實業に適せらるるや否やを憂ふるものに候。令弟、直截にして敢爲、些の屈折なく、心事高潔にして求むる所あるなし。これ貴族としては立派なる貴族に候へども、屈折變化多き實業社會に處する所以の才にあらざるべきかとも存ぜられ候。植木屋は如何

にしても大工にはなれず候。なりたる所が才能の誤用にして損失に候。

小生、嘗て一少年を商業學校に入らしめんとし、その父兄も諾し、本人も承知致候處、何時の間にやら、その志望を變じて軍人ずきとなり、到頭今はさる聯隊の中尉と相成り候。年齢より申せば大尉となるべき筈なれども、商業學校の準備にて空しく歳月を送りし爲に、この損失を招き候。一時の發憤は永續するものにこれなく候。小生は、令弟の實業云云は、周圍の何等かの事情に

催されて發憤せられたる結果にあらざるなきかと疑ひ申候。もし果して然らば、決して永續すべきものにあらず、斷じて抛擲せらるる方然るべく候はん。

つらつら人生を觀察するに、人の運命は略その性質によりて、先天に決し居るが如くに候。性質以外の事を爲さんとすとも、水を高きに上らしめんと欲するに等しく、その功、勞に酬いざるべし。これ老兄の冷靜なる判斷を要する所ならんと存じ候。事令弟の禍福に關す、直言不諱の段

偏に御許し被下度候。頓首。（竹越與三郎―三叉書翰）

二三　實業

實業とは何ぞや、姑く辭書の解說を擧げんか。曰く「商工業は總てこれ實業なり」。曰く、「會計・調理の方法を知るを必要とする業務なり」。曰く、「營利・收益の業務なり」。然れども余は實業の意義をして、今一層的確ならしめんが爲に、なほ一歩を進めざるべからず。余の見る所を以てすれば、俸給を受けて業務に從ふ者は實業家にあらざるなり。余の所謂實業家とは、少なくとも、自己の經營する事業の一部を有するものたらざるべからず。卽ち其の收入を俸給に仰がずして、之を事業の利潤に仰ぐものたらざるべからず。實業家は人海の波濤に飛込むも能く游泳し、生命の救濟、俸給に資らざるなり。俸給は如何に多くとも、之を以て巨富を爲すには足らざるなり。

又實業家たるものは、其の資力の全能を盡して其の業に從ひ、一意專心以てこれを經營せざるべからず。見よ、彼の法律家・醫師・建築家等の如き專門の業務に從ふ者に在つては、皆その業務に專一ならざる能

はず。實業のみ如何で獨り然らざるを得んや。

青年の實業界に投ずる、多くは巨富を目的とす。然り、致富は實業の目的ならざるにあらず。然れども實業の能事は、唯致富を以て了るにあらず、更に伎倆の英邁、氣力の雄偉、決斷の正當なるを示し、其の他、人性の良質を發揮して、社會同胞を益するは、是亦實業家の常に期せざるべからざる所なり。

余は、實業と他の業務とが人性に及ぼす感化如何に就きて、少しくこれを論ぜざるべからず。技藝家は最も褊狹にして妬忌し易く、偏に虛名を喜びて心術

不良に陷り易し。これ其の通弊にして、これを實業家に比するに、大いに異なり。音樂・繪畫・彫刻の如き、皆高尚・優美の技術なれば、これを業とする者は自然これが感化を受けて、其の品格を高尚・優美ならしむべきが如しと雖も、實際は決して然らず。技藝家の製作は、世人の細觀・精察に遇うて、これを品評せらるる事極めて詳覈なるを以て、其の巧拙・優劣一點も逃るる所なく、爲に技藝家は、微細の點までも、其の長短を比較せられざるを得ず。其の互に妬忌し易く、隨つて褊狹・固陋に陷るは免れざる所なり。

實業家に在つては則ち然らず。其の解決すべき問題は、常に變換して窮まりなし。故にこれを解決するに、許多の事項を詳知し、因りて以て圓滿なる決斷を下さざるべからず。方今の實業家にして大業を成さんと欲する者は、唯國土の形勢、其の貧富・利源・統計・收穫・交通等、凡そ現在に於ける百般の狀態を諳知するのみならず、常に觀察・思考の材料を貯へて將來を豫想し、以て大いなる謬見に陷るなからんことを勉めざるべからず。殊に大商業家は其の關係各國に涉るを以て、其の國情の大略を諳知するの必要あり。故に

* Constantinople. トルコの首都。

其の觀察する所、殆ど全世界に及ぶを要す。例へばコンスタンチノープルに於ける國際の葛藤、東洋に於ける虎列刺病の發生、印度に於ける暴風又は蝗蟲の發生、各國の國際親好の狀況、其の他、戰亂の危險、もしくは內閣の交迭等の如き、凡そ捉へて以て觀察・思考の材料と爲すべき世界の出來事は、皆これを心頭に上せ、これによりて其の營業の進退を決せざるべからず。更に其の使役する數百千人の中に就きて、其の材幹・品格を擇び、以て適材を適所に置き、又自ら組織の材に長じ、能く實行の力に富み、果斷・勇決、敢て謬る

ことなきを必すべし。その識見高邁、氣宇闊大ならずして、豈によくすべけんや。（カーネギー―實業の帝國）

二四　拙速

人の嗜好は千差萬別である。又、父母より享けたる性質も決して同一ではない。隨つて人が此の社會に出て爲さうと思ふ事業は種種樣樣である。或は實業家、或は軍人、或は官吏、或は學者、僧侶、其の目的とする所は等しくはない。併し兎にも角にも男兒たる者は、この五十年の生命を空しく過すと云ふやうな意氣地の無いことでは可かぬ。何なりとも一つ、一箇の男兒として愧ぢざるだけの事業を成し遂げなければならぬ。事に依れば震天動地の大事業をも成し遂げることが出來ないとも限らぬのであるから、男兒、須く手に唾して立つべきである。

然るに能く人の性行を觀察して見ると、大きく別てば二つの區別がある。或者は隨分知識もあり、學問も無いことはないが、餘り用心深くて、兎角引込思案であり、何時か何事かをしようと云ふ考はあるけれども、容易に何事にも着手しない。其の中に、段段機會

は過去り、境遇は變化して、到頭、一生涯何等の事業をも成し遂げずして、墓場に入つてしまふ。さういふ人は隨分世にあるものである。人は用心しなければならぬけれども、餘り用心し過ぎて、唯、手を束ねて老と死とを待つのは情ない。苟も活社會に出て事業を爲さうと云ふならば、多少失敗の處はあつても、突進して機會を捉へなければならぬ。

蓋し活社會に奮鬪して事業を爲さうと云ふものは、どれだけかの失敗は如何なる人でも免れない。併し其の失敗は、皆、活きた教訓となるものである。一度失敗すれば、其の次には同一の失敗は反覆しない。かくて段段と自己を訓練して行くのが、所謂經驗であり、熟練である。

されば暴虎馮河の戒むべきは勿論ではあるが、徒に遲疑逡巡せず、自ら進んで取る決心を爲さなければならぬ。孫子に「兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを覩ざるなり」とある。是は兵法の語であるけれども、活社會に奮鬪する場合にも、よく適合するのである。迅速に事を爲せば、巧みと云ふ點に於ては十分でない、どうしても拙くなる處はある。拙いが宜しいのでは

ない。巧みと云ふことが惡いのでもないけれども十分巧みにやらうと思へば、つい遲くなつてしまふ。遲くなるよりは、少少拙くても、迅速にやつて退けた方が成功の見込がある。

これが成功の一祕訣である。既に拙速であるから、往往失敗もあらう。併しその失敗は成功の基であるから、決してこれが爲に沮喪落膽すべきでない。かくて失敗を重ぬる毎に、經驗と熟練とを加へ、一難を經る毎に、進取の氣象が一倍し來れば、遂には偉人・傑士たるべき大決心・大勇猛心を養成し得るのである。

二五　豐太閤の逸話

（井上哲次郎―「人格と修養」に據る）

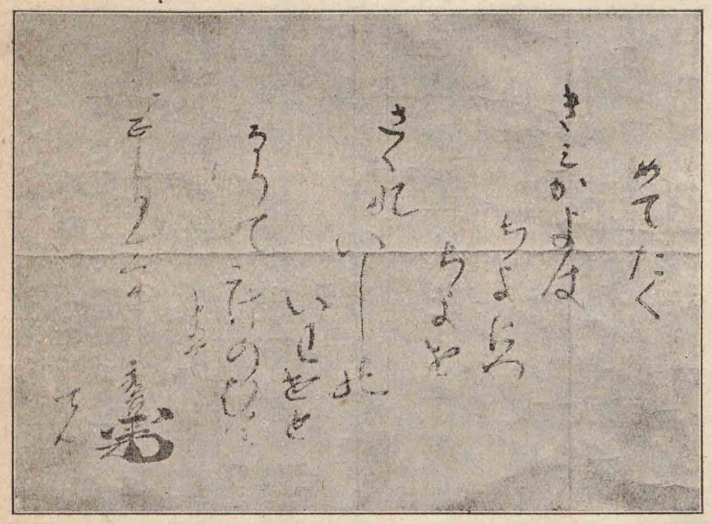
豐太閤は天性豪放なりしかば、頗る洒脫なる逸話に富めり。元來貧賤なる家に生れて、生涯の大部分を戰鬪攻伐の事に委ねたれば、文字の知識には乏しかりしが、少しもこれに頓着せず。人に與ふる書翰・命令の類を自ら記す時は、多く平假名にして、偶漢字あれば過半は宛字なりき。その上に文章の拙しとおもふ所は、屢消しては書續けたれば、當時これをお草紙の

豐臣秀吉。（一二九六―一三九八）

御文書と稱して、諸將はこれを得るを名譽となしたりとぞ。

名高き醍醐の花見の折にやありけん、太閤は祐筆を召して、一篇の通牒を起草せしめたり。祐筆は命によりてこれを書きをりしが、忽ち筆を停めて何事か思案する體に、太閤は「何を案ずるか」と問はる。祐筆恐縮して、「實は醍醐の醍といふ文字を、ふと失念したれば」と答ふ。太閤焦立ちて、「益なき事に屈託する者かな。それはかく書くべし」と云ひつつ、指にて疊の上に大の字を書きて示されたりといふ。

慶長三年（一五九八）三月、秀吉花を山城醍醐三寶院に觀る。一代の豪華を極めたりといふ。



豐太閤筆蹟

或歳、東山に松蕈多く生えたりと聞きて、近日蕈狩を催さんとありしかば、役人ども見分に出かけたるに、はやくも諸人分けいりて、殘少なに取去りたり。かくては興なからんとて、内内、處處より松蕈を取寄せて巧みに植ゑおきたり。その日になりて、太閤は奥女中達

數多召連れて山に登り、蕈の多きにいたく興ぜられて如何にも滿足の體なりけり。これを見て、お側の女中達は、「自然に生えし蕈と人の植ゑしとは、誰が目にも著きものを、殿下は心づかせ給はずや」とて、袖を引きけるに、太閤はその辭を遮りつつ、「言ふな、言ふな。我等を喜ばせんとて、役人どもは幾許か骨折りつらん。その骨折を買はでやは」とて微笑せられたり。

太閤は平常鶴を愛して、これを苑中に飼はせたり。一日監者の誤りてとり逃したりしかば、恐惶罪を請ひしに、「逃げたる鶴は外國へ飛去りつらんか」と問はる。「飼鳥のことなれば、さまで遠くはえ飛び候はじ」と答ふるに、「外國に行かねば、何處にありとも、わが樊籠の中なり」とて、監者の失職を問はんともせられざりき。

小田原落城の後、一日太田三樂(二)を招いて軍事を談ぜしめ、これを傾聽しつつ感歎せられしが、ややありて、「その方は智・仁・勇の三德を具へたる良將なり。それにひきかへ、我にはその一德だになし。然るに不思議にも、その方は一國だに取りえぬに、我は天下を取れり。天下を取ることのみは我が得手なりと見ゆ」とて

(一) 天正十八年。(一五九〇)
(二) 太田道灌の曾孫名は資正。(一三八六—一四五二)

放笑せられたりとぞ。（福本日南―「太閤論」に據る）

二六　筆の歌

月花めづるみやび男が
向ふ机の紙のうへ、
走ればやがて歌成りて、
星照り、日出で、鳥歌ふ。
天地ゑがく繪だくみが
倚るや南の窓の下、
動けばやがて畫は成りて、
水落ち、木生ひ、草青し。
壯心鬱勃天を衝く
英雄の手に觸るる時、
落筆のもと龍蛇とび、
雲煙くらく地を蔽ふ。
慷慨淋漓怒髮立つ
志士のかひなに執られては、

片言隻句鬼神泣き、
哀音ながく世に傳ふ。

功成り、名とげ、業卒へて、
身は棄てらるる竈の中、
煙と化して消ゆれども、
恨まぬ筆の心清しや。（武島羽衣）

二七　蜀山人の盆燈籠

文化元年の頃とか、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男

（一）二四六四。

住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠と云ふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、殘りしは多ければ、力を落し、情なき顏してかつぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常常出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ、「偖偖困る事かな、この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ殘り候。この分にては明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細

（一）名は覃、蜀山人、又は四方赤良、寢惚先生ともいふ。狂歌狂文を以て名あり。（二四九一―二四八三）

工にせし事にはあれど、聊か資本もかかりたり。この分にては水も呑まれ申さず」とかこちけり。南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや」と問はるるにぞ、傍の者、斯様斯様にて、「又かの泣き男がかこち申し候」と言ひければ、翁は臺所に出られ、「偖も氣の毒な事よ、頤の下が乾きては誰も難義ならん。わが言ふ如くせば、少しは賣れる事もあるべし」といはれければ、「それは有りがたき事に候。いかに致すべきにや」と、翁の顏をいかにも有難氣に仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五

帖ばかり取出し、「これにてその燈籠を張替へよ。われそれに何か書きてやらん」といはる。悅びて立歸りしが、忽に百ばかり張替へて持てきたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつつ一禮を述べて、荷ひ歸りながらも、「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れぬに、いかに先生なればとて、かかる冗書の反古張にては買人はあるまじ。さりながらあれ程に仰せられし事なれ

太田南畝筆蹟

ば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、賣れ殘りたらば、その事を申して歎きつき、*二百疋も借りて外商ひの資手とせん。」と、工面顔にて足も重く、二三町歩む向ふより、侍一人來かかりしが、供の者に言付けて、「その燈籠は賣物か。」と問ふ。偖はと悅び、「いかにも賣物に候。やうやう傳を求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。」と云ふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。幾許と云ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて五十文と云ふ。「その直にて二

*二百疋は金二分即ち一兩の二分の一なり。

つ吳れよ。」と、百文渡して買行きたり。又跡より通りかかりし人、「それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は息を一杯に吹きて、六十四文と云ふに、いふがままに又買行きたり。跡より又此方へも二つ、我にも一つと、おのが家に歸る迄に二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、かくと女房に話せば、「誠に寢惚樣は生佛樣なり、あり難き事なり、明日は早くより持出て給へ、私も參りて手傳ひ申さん。一人にては手も足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智惠の慾が先。夫婦はにこにこ、七つ起して神樂阪に

行き、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて百文と言へば、「さもあるべきぞ。」と、百文にて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに大勢買つて行かるるから、は、二百文といふも賣れ申さん、二百文といひ給へ。」と。又智惠をつくるに、庄助額に手を加へつつ、「二百は餘り高かるべし、さらば百五十文。」と云ふ。それより百五十にて六七十を賣り、遂には先見明かなるその妻の言の如く、「二百文より一文も引かず。」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切れたり。*錢二十貫程、金

*錢と金との比價は時代によりて高低あり、當時一兩に錢六貫三四百文なりしなり。

にして三兩ばかりになりし故、夫婦こけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房まかり出で「有り難い。」を數千遍のべて、「いかにも先生は生神樣なり。」と、今度は神あしらひにしつつ悅び歸りしとぞ。翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。（饗庭篁村―雀躍）

二八　讀書

常に良き著述に親しむものは、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり、失意にも慰み、不平・憂悶もこれを忘る。「書は少

年の滋味にして老年の娯樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とはならず。家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と、羅馬の名士(一)キケロの言ひたるも同じ心なり。されどかくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國内の山

(一) Cicero. (B.C.106—43)

水・風俗だけにても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮まりなきを思へば、人間一身の經驗の狹く、淺く、小さく且つ少なかるべきは言ふにも及ばぬ事なり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人人は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外・古今の名著を得て、之に親しまん事を願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた、凡そ三千年間に出でたる大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのままに、又は(二)ランビ

(二) Lambique. 葡萄牙語。

キにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。もとより人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且つ大いなるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を借ることなく、只その貧弱なる惱力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへも、正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙これに盡きたるにあらず。

(一) Petrarca. (1304—1374)

(二) Channing. (1708—1842)

伊太利の詩人ペトラルカ(一)は曰く、「予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と、これ良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奬勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニング(二)も曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかかる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に對ひて語り、その最も貴き思想を吾人に與へ、且つその心靈を吾

人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトン(一)もまた曰く、「良書は保存蹈襲して後世に傳へられたる、俊傑が貴重なる生血なり」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若しかりそめにも、その偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極まれるに

(一) Milton. (1608—1674)

ちかしといふべし。（坪内逍遥—中學修身訓）

二九　洋學の由來

洋學の由來を尋ぬるに、昔、享保(二)のころ、長崎の譯官某等和蘭貿易の便を計り、その國の書を讀習はんことを請ひて、その許可を得たり、これ卽ちわが邦の人が横行の文字を學べる始なり。その後、寶曆(三)・明和(四)の頃、青木昆陽、命を奉じてその學を唱へ、又前野蘭化・桂川周甫・杉田鷄齋等起りて、和蘭の學に志し、相與に切磋して各、得る所あり。されどなほこの學の始なれば、書

(二) 二三七六—二三九五。
(三) 二四一一—二四二三。
(四) 二四二四—二四三一。

籍甚だ乏しく、師友もなければ、遠く長崎の譯官に就きてその疑を質し、偶〻和蘭人に會へばその教を請へり。かく不便なりしかど、この人人いづれも英邁の士にして、只管草創の業に身を委ね、日夜研精して寢食を忘るるに至れり。或は傳ふ、蘭化、長崎に往きて和蘭語七百餘言を學び得たりと。これに由りても古人が力を用ふるの切なりしと、修學の難かりしとを察すべし。

その後、大槻玄澤・宇田川槐園等繼いで起り、降りて天保・弘化の際に至り、宇田川榛齋父子・坪井信道・箕作阮甫・杉田成卿兄弟、及び緒方洪庵等輩出せり。この時は讀書・譯文の法漸く開け、諸家翻譯の書續いて世に出でたれども、概ね和蘭の醫籍に止まり、旁ら窮理・天文・地理・化學等の數科に及べるのみ。故に當時この學を稱して蘭學と云へり。蓋しこの時と雖も、通商の事は、支那の外は和蘭一國に限り、來舶の地も只西陲の長崎のみなれば、尚書籍の乏しかりしは論なく、すべて修學の道甚だ便ならざ

前野蘭化

りき。

然るに嘉*永の末アメリカ人が渡來せし後、これと和親貿易の約を結び、又好を英・佛・露等の諸國に通ぜしより、わが邦の形勢終に一變し、世の士君子皆かの國の事情に通ずるの要務たるを知れり。因りて百般の學科一時に興り、先達の士各〻その學を唱へ、生徒を教へ、ここに至りて始めて洋學の名起れり。これ豈に學術の一大進歩ならずや。

顧ふに、一事の將に開けんとするや、進むに必ず漸を以てす、譬へば樓閣に登るに階級あるが如し。卽ち天保・弘化の際蘭學の行はれしは、寶曆・明和の諸士その初階をなし、方今洋學の隆盛なるは、各國の通好に因れりと雖も、實に天保・弘化の諸家その次階をなせるなり。（慶應義塾五十年史）

*嘉永六年（一八五三）ペルリ來る。

三〇　黃色人種の自覺

三十七八年戰役は、我も人も思ひ掛なき大影響を世界に來し、且つ來さんとするなり。大影響とは、世界の黃白二大人種の間に、平等を齎す傾向是なり。

換言すれば、世界の優等人種として自負したりし

白皙人種に向つて、劣等人種として侮蔑せられたる黄色人種が、從來の隔絶したる權衡を恢復せんとする運動是なり。是實に二十世紀に於ける世界の大現象にして、假令三十七八年戰役が其の唯一の原因たらずとも、主要なる動機たりしには相違なきものの如し。

從來、白皙人種は自ら上天の選民たるが如き意識を有し、人類中の人類は吾等にして、他の所謂有色人種とは、決して對等の交際をなすべきものにあらずとの觀念を有したりしことは、着着事實の上に證明せられたりき。彼等が久しく、國際法適用の範圍を基督教國に、事實に於ては白皙人種間に限りたるが如きは、其の一例にあらずとせんや。

人類同胞、四海兄弟をもつて其の信條の一とする基督教宣教師の如きさへも、彼等の所謂土人、若しくはその信徒に接するや、決して恭謙の美德を發揮したりとのみ謂ふべからず。我が國に於ては、國民的精神の頗る横溢したるが爲に、彼等の非人道的陋態は比較的に多からず、且つ著しからざれども、清國に於ては、或宣教師の地位は恰も征服者の如く、其の土人

を見るや、物の數ともせぬ風なきにあらず。吾人は一切の宣教師に就て、斯く判斷を下すほど大膽ならず、且つ幾多の宣教師中には、眞に有德の君子あるを信ずれども、又上記の如き徒輩あるは、公平なる傍觀者の往往目擊して、竊かに顰蹙したる所なりき。

三十七八年戰役は、白皙人種に向つて、如何なる程度まで、此の人種的迷信を打破したるか、白皙人種の中には、白人以外に敬畏すべき人種の存在するを認容したる者あらん。然れども吾人は彼等の覺醒に多きを望むよりも、寧ろ黃人の自覺に驚異せざるを得

(一) Turkey(Turk.)
(二) Egypt.
(三) Persia.
(四) Siam.

ず。白人が黃人を對等視すると否とは暫く措き、黃人が白人を對等視し、これと同時に對等的待遇を彼等に要望し、若しくは要望せんとする徵候は、歷歷として、卽今に續出する事實にして、土耳古(一)・埃及(二)・波斯(三)・暹羅(四)いづれも多少の刺激を被らざるなし。就中注意すべきは支那人の自覺是なり。

支那人は、從來自ら中國人を以て居り、他の人種を蠻夷視したるに拘らず、所謂蠻夷たる白人より非常なる虐遇を被りても、殆ど意に介する所なきものの如くなりき。今や然らず、彼も人なり、我も人なりとの

觀念は殆ど支那全國に普及し、單に新問題に關して對等の地位を占めんと欲するのみならず、從來設定したる事柄にも、出來得るかぎり、其の平衡を恢復せんと企つるものに似たり。政策としての得失は、吾人が今茲に問ふ所にあらず。然れども其の平等的自覺心は、決して看過す可からざる現象とす。

我が國は、黃人に斯かる活動を有意的に敎唆したるの責に任ずる能はず。されど彼等の多くは我が風を見て興り、若しくは興らんとするものなり。

如何にいひ逃れんとすとも、日本帝國の先例は、總

ての有色人種、特に黃色人種の自覺の動機となりし事實は抹殺す可からず。果して然らば、吾人は寧ろ男らしく此の人種競爭の一大渦中に飛込み、此の大勢を利導するに若かず。黃人の重荷は我が大和民族の雙肩に在り。吾人豈に小成に安んず可けんや。日本國民の事業、ここに於てか遠し。（德富蘇峯）

修訂新撰國語讀本 卷三 終

大正三年十二月四日改訂再版印刷
大正三年十二月七日改訂再版發行
大正六年十月二十三日修訂印刷
大正六年十月二十八日修訂發行
大正七年一月十日修訂再版印刷
大正七年一月十四日修訂再版發行

修訂新撰國語讀本（全十册）

定價	
卷一、二	各金參拾六錢
卷三、四	各金參拾壹錢
卷五より卷十まで	各金貳拾九錢

大臨時年度定價	
卷一、二	各金四拾壹錢
卷三、四	各金參拾六錢
卷五より卷十まで	各金參拾參錢

不許複製

著者 東京市小石川區大塚窪町八番地 佐々政一

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社明治書院 取締役社長 三樹一平

印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替口座東京四九九一番 株式會社明治書院 ☎電話本局二三九八番